

〔エッセイ〕

ドストエフスキー

「ロシアの修道僧」を読む

↳ 『カラマーゾフの兄弟』より↳

渡 辺 二 郎 (地理歴史科)

一 はじめに

二〇二二年は、ロシアの文豪フョードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキーの生誕二〇〇年にあたっていた。本来であれば当年には、世界各地でこれを記念する行事が開かれるはずであった。しかし、世界中に蔓延したコロナ禍の渦中で、公開での記念行事は著しく制限を受けたようである。わが国においても、特に大きな祝典が行われたとは、記憶していない。その前年（二〇二〇年）のベートーヴェン生誕二五〇年が、やはりコロナの影響で寂しく終わったのと同様、ほんとうに遺憾な思いがする。

そこに翌二〇二二年二月二十四日のロシアによるウクライナ侵攻が起きた。あれ以来ロシアの国家イメージは、著しく毀損されたように思う。一部の国ではロシア文化そのものを否定する動きもあり、あるヨーロッパの国ではロシア音楽の演奏を禁じる事態まで生じた。このような文化排斥にどのような意味と結果があるのかは分からないが、一言をさしはさむのが可能ならば、「ロシア最大の大作曲家」とされるチャイコフスキーの先祖は、実はウクライナ人である（同時に彼はセクシユアル・マイノリティでもある）。ちなみに過日死去したソ連最後の指導者ゴルバチョフは、母親も妻もウクライナ人である。「ロシアは何でも敵で悪」と事態を単純化するのには、分かりやすくもあり、また実に危険でもある。なぜならこういつた姿勢は、問題を矮小化し、問題の本質を看過してしまう危険があるからである。

そのことでは、昨今のウクライナ戦争に関する報道そのものにも、類似的の思考が潜んでいるように思う。確かに、国連加盟国のしかも安全保障理事会の常任理事国であるロシアによる他国への主権侵害は、まず第一に批判されるべきことである。そ

の「戦争犯罪」（「平和に対する罪」においても「人道に対する罪」においても）は、徹底的に追及されるべきである。しかし他方、この約三〇年、旧ソ連邦地域とその周辺でどのような

問題や事象が生じていたのかは、今回の紛争の起点を考える際には、絶対に留意すべき問題である。一九九一年のソ連邦崩壊以降、ロシア共和国以外の各「共和国」に居住していたロシア人たちは、独立した各国で「ロシア系住民」として少数民族へと追い込まれた。彼らが各国でこれまで「少数民族」としてどのような辛酸をなめてきたか、なぜか報道ではほとんど伝えられていない。じつさい現在でも、ラトビアでは「ロシア系住民」は国籍さえ与えられず、「国民」とみなされていない（EU加盟国であるラトビアは、EUから改善の勧告を受けているはずである）。「ソ連崩壊は二〇世紀最大の地政学上の悲劇」（プーチン）とするなら、現在も進行中の地理的条件に発する種々の問題は（島国に住み陸上で他国と接していない我々にはなかなか分かりにくい）、プーチンを懲らしめただけでは、この実情が変化することはないであろう。今回のプーチンによる「蛮行」が、場所を変えると「義拳」にさえ映っていることを、問題全

体の深刻さを知る例として認識しなければいけないと思う（たとしてもプーチンの行為は絶対に許容できるものではありませぬ）。

ロシアの侵略という国際法違反行為を絶対に許してはならないことが、確定した認識であることは論を待たない。しかしそれなら、一九九九年のNATOによるユーゴスラビア空爆（実質セルビア空爆）、あるいは二〇〇三年の米英によるイラク攻撃は、双方とも国連安全保障理事会の決議のないまま行われたことを、どう考えるのか。明文上の規定がないなら、いかなる法源を根拠にこのような戦闘行為は行われたのか。

あの時、欧米側は、セルビア側がジェノサイド（集団虐殺）を行っているととして、ユーゴ系住民に住民投票を許し、結局「ユーゴ共和国」としてセルビアから独立させ、国家承認した（二〇〇八年）。しかしその推移は、ウクライナのドンバス地域の、「ロシア系住民」が多数を占める一帯に住民投票を経て「建国」された、「ルガンスク人民共和国」と「ドネツク人民共和国」を、今度はロシアが国家承認するという過程と何ら異なることはない。またこんにち、かつての「旧ユーゴスラビア紛争」

において、ジェノサイドを行っていたのはセルビア側だけではなく、明瞭な周知の事実である。ウクライナ問題においても、「ミンスク合意（ミンスク2）」（二〇一五年）を反古にし、二〇二一年一〇月に、ドンバス地域の「ロシア系住民」に攻撃を加えたのは、ゼレンスキー政権下のウクライナ軍であったことは、忘れてはならないと思う（もつとも、今やそのセルビアがE.U.に加盟申請をするという国際環境の情勢の変化の速さには言葉を失うが）。

二〇〇三年の米英によるイラク攻撃の根拠は、イラクが「大量破壊兵器」を違法に所持しているということであった。しかし、結局イラクからは「大量破壊兵器」は発見されなかった。にもかかわらず、明確な根拠もいままに、米英は主権国家の政府を一方的に崩壊させた。そうなる、ロシアのウクライナ侵攻を批判する欧米側は、その道義的裏付けを失うということになる。つまり、批判する者たちの手も同様に汚れているということなのだ

「ヨーロッパは我々を途方もなく嫌っている。我々を一度たりとも、自分たちの仲間—ヨーロッパ人とみなしたことがない」

（ドストエフスキー『作家の日記』より）という事態は、こんにち少しも変わってはいない。ロシアのウクライナ侵攻と、その周辺問題は本稿の主意ではありませんが、一言申し上げたいと思いました。

二 「ロシアの修道僧」

「ロシアの修道僧」とは、ドストエフスキーの最後の作品となった『カラマーゾフの兄弟』の主人公とされるカラマーゾフの家の三男アレクセイ・カラマーゾフ（アリョーシヤ）が、師でありロシア正教会のスヒマ僧（スヒマ僧とはロシア正教における最高位の修道僧）であるゾシマから、その最後の日々に聞き取った、幼少期から修道生活にいたるまでの人生経路を、遺稿としてまとめたものである。

「ロシアの修道僧」は、私の読んだ『カラマーゾフの兄弟』の新潮文庫の翻訳では、中巻のさらに中ほどに位置している。私は、この長くはない挿話に、ドストエフスキーのそれまでの諸作品、すなわち『罪と罰』、『悪霊』、『白痴』、『地下室の手記』

といった作品の基幹部分が、簡潔なアダプテーションのかたちで、しかも時にいつそう意味を深めて展開されているように思う。本稿では、タイトルの字面とはやや異見となるが、ゾシマ死後のその後の作品の展開についても考察し、本著『カラマーゾフの兄弟』全体の意味についても考えたい（と、思います）。またその際には、森有正、小林秀雄、埴谷雄高、あるいはベルジャーエフ、ジツド、シエストフといった、内外の偉大な先達たちの評文も手がかりにしたいと思う。

ドストエフスキーはキリスト教（彼の場合はロシア正教）作家であるといわれる。多くの国民が確たる信仰を持たないわが国において、ドストエフスキーを読む際には、その点の違和感はないかと思う。しかし、生と死、罪と罰、悔悟と救済といったテーマは、宗教を離れても人類普遍のテーマともいえる。何となれば、それは私たちがいかに生きるかという問題とも関わるからだ。

私が『カラマーゾフの兄弟』を初めて読んだのは、大学一年生の時である。もともと、私は二年間の浪人生活を経て、ようやくとこさ大学生になったので、大学に入学した時にはすでに

二十歳を超えていた（中杉出身の友人たちは私より二歳年下だったが、私は彼らから「じろー」と呼ばれていた）。両親からは当時また大学に通っていた兄と東京のアパートで同居するか、自宅から通うかの選択を迫られたが、二年浪人したことの負い目も多少あり、結局自宅から大学まで通うことにした。通学時は膨大なものとなったが是非もなく、電車の中での時間は読書にあてることにした。そしてこのとき以来、生まれて初めて読書をするということが、生活習慣の一部となり、こんにちもなった（高校時代は「讀書感想文」を提出するなんてますなかつた）に、今は生徒たちにレポートの期日を守るように「指導」している。

大学に入学して初めて読んだ小説が遠藤周作の『沈黙』、次に読んだのが倉田百三の『出家とその弟子』、そしてその次がこの『カラマーゾフの兄弟』であったように記憶している。「深遠博大な愛の著」（森有正）ともいわれる『カラマーゾフの兄弟』の心象風景は今でも、大学と自宅を往復した列車の窓外の風景とともに、幾重もの回想の襞を、時に寂しく、しかも心地よく震わせる。

以下、『カラマーゾフの兄弟』からの引用は、新潮文庫、原卓也訳、上・中・下巻を用います。私は原語（ロシア語）は全く解しません。以下の(A)、(B)、(C)、(D)のタイトルは「ロシアの修道僧」の展開に従ったもので、新潮文庫の翻訳によったものです。

(A) ゾシマ長老の若い兄

ゾシマ長老の遺稿は、わずか十七歳の若さで結核で亡くなった兄マルケールの回想から開始される。「もしわたしの人生にこの兄が現れなかつたら、この兄がまったく存在しなかつたら……(中略)……この尊い道に足を踏み入れることもなかつたにちがいないと、思うからです」

幼き日のゾシマの家庭は、父が早逝したことで、母と兄マルケールとの三人暮らしであった(父の遺した十分な財産のおかげで召使が四人いた)。母は敬虔なロシア正教の信者であった。ゾシマの人生の開始は、この母親のもとで、厳かで、何の疑念もない小さな幸せの中にあつた。しかし、青年期を直前に迎えた兄マルケールは、政治犯として当地にやって来た自由思想家

のもとに出入りを始め、しだいに神を否定するようになっていく。「そんなことはみな、ばかげた話さ。神なんぞ全然ありやしないんだよ」と毒つき嘲った。教会へ通うことなど、当然のように軽蔑した。

そんな折、この利発な少年を突然の病が襲う。急性の結核で、医師は母に、命旦夕に迫るマルケールの余命を伝えた。マルケールは、母の悟られまいと強張る表情と、自身の身体の急激な衰勢に、命の残りの日数を悟った。するとマルケールは突然再び教会に通い始めるようになる。「これはお母さんを喜ばせて安心させるためにやってるんですよ」と、少なくとも最初は母にそう言った。

しかし病魔の進行は、間もなく教会へ通う力さえ、マルケールの身体から奪っていく。マルケールは、やむなく懺悔も聖餐も家で受けることになった。兄の部屋には毎朝、陽光が充ちる。病軀はむしろ美しく光に照らされる。

「お母さん」と兄は答える。「泣かないでよ。人生は楽園なんです。僕たちはみんな楽園にいるのに、それを知ろ

うとしないんですよ。知りたいと思ひさえすれば……（後略）」

マルケールの行動の変化の端緒は、ともかくも母親への愛憐の情から発したものであつた。どこまでも母を安心させるための、外面的な、かりそめの繕いにすぎなかつたはずだつた。しかし目前に迫る死の前に、次第にマルケールの心の中にも大きな変化が生じていた。その心の大きな変化は、美しい自然の情景として反映する。

庭には古い木々が仄暗い影を作つていたが、木々には春の若芽が萌え出て、早くも渡つてきた小鳥たちがさえずり、兄の窓に向かつて歌つていた。

幼い弟ゾシマの心の奥に、兄の最後の日々の美しい光景が、静かに包匿されていく。のちにゾシマ長老は自らが臨終の時を向かえる日、回想に身を委ねつつ、これを言葉に遺す。

こうして兄は日がたつにつれてますます感動と喜びを強めながら、全身を愛にふるわせて、眠りの床から起きだしてくるのだつた。

マルケールは、それまでは傲然と振る舞つていた召使たちを、親切に扱い始める。「前には禁じたりして、僕は悪い人間だつたね。燈明をともしながら、ばあやは神さまにお祈りするのだし、僕はそんなばあやを見て喜ひながらお祈りするよ。つまり、僕たちの祈りをあげる神さまは同じつてわけさ」、「お前たちはやさしくて親切だね。どうして僕に仕えてくれるんだい？ 仕えてもらうような値打ちが僕にあるだろうか？」。

マルケールは夜どおしの高熱と咳に苦しめられながら、日々に衰弱していく。しかしある時、彼の口から次のような言葉が発せられる。

「本当に人間はだれでも、あらゆる人あらゆるものに対して、すべての人の前に罪があるんです」

マルケールは同じ言葉を小鳥たちにまで囁きかけ、赦しを乞うようになった。もしこの言葉を共通の意義のまま転回させると、「世界ぜんたいが幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」(宮沢賢治『農民芸術概論綱要』)ということになるのか。幸福とは主観的情緒である以上、客観的判断が入り込む余地はないが、それでいて主観的判断を超えるものである。幸福は主観にとどまるうちは、幸福とはいえない

つまり、すべての人々は関わりあいの中に生きるものであり、世界中の人が幸せになるまでは、あらゆる人はあらゆる人に対して寛容のままに存在している、ということなのだと思う。

むろん「すべての人」や「世界ぜんたい」を識ることは不可能である。だがもしそれに覚醒しさえすれば、そこでは自己が自己自身から自由になり、他の人間を人間として尊重し生かすということをも、すでに包含しているといえる。

「人間が幸福を知りつくすには、一日あれば十分ですよ」とマルケールは言う。もとより危篤の病人に、陳腐で凡俗な意味での幸福など、もはや望める道理がない。しかし真の幸福とは時間の過程の中に漸進的に発展的に実現されていくものではない

く、直下に刹那に、しかも圧倒的な現実として存するのではあるまいか。もちろんそれは刹那に消え行きただの一時の充足のようなものではない。死という時間的な遮断によつて失われるのではない。失われると認識するとすれば、それは「時間」を發明した人間の幻影にすぎない

「過去と言ひ未来と言ひ、僕等には思ひ出との異名に過ぎず、この生活感情の言わば対照的な二方向を支えるものは、僕等の時間を發明した僕等自身の生に他ならず、それを瞬間と呼んでいかどうかさえ僕等は知らぬ。従つてそれは「永遠の現在」とさえ思われて、(後略)」(小林秀雄『ドストエフスキイの生活』)

恐らくここに、『悪霊』に登場するキリーロフへの、作者じしんからの回答があるように思う。キリーロフの自殺は、死ぬことによつて死を乗り越える、逆説的な「死の克服」であつた。「神の意志に従わず我意を完全に貫いたとき、神が存在しないこと、自分が神となることが証明される。完全な我意とは自殺である」。しかしキリーロフには自殺の敢行が、実は「死」への恐怖の裏書きにすぎないことを、最後まで認識できなかった。

「死は、「恐怖」を動機として克服されるものでも、恐怖そのものでもない。少なくとも自殺はその解決手段ではない。なぜなら、もしこれが死が目前にした人間であるなら、恐怖の克服としての自殺などに、もはや意味がないはずだからである。幸せになるために人は生まれてきたとすれば、人はいつでも幸福を実感できる。「知りたいと思えば、明日にも、世界中に楽園が生れるにちがいないんです」と、マルケールは言う。

「死への先駆的決意」(Vorlaufende Entschlossenheit ハイデガー)という。しかし死を先駆するという生き方は、合理的のようにみえながら、決して生の充実をもたらさない。また死を意識しないという生き方が、自己を喪失した生き方とは限らない。死をいずれ訪れる未来の諦念として確定し、そこから演繹される人生とは、実は限定した生のあり方にすぎない。人生とはゆくりなくも相交錯する累次の邂逅であって、方法的な合理性をもつては決して汲み尽くせないものである。またそうであるとするは、そもそも人生が自己を起点に合目的に構築されるはずもない。

小林秀雄が引用した「永遠の現在」(aeternum praesens)

とは、もとはアウグスティヌスの言葉である。かの教父も、幸福を時間軸の中にはなく、今まさにここにある時空を超えた結び合いの中に見い出したのであると思う。

もはや口こそきけなかったけれど、最後の瞬間まで少しも変わらず、嬉しそうな顔をして、目には快活な色をたたえ、眼差しでわたしたちを探しては、微笑を送つてよこし、わたしたちを呼んでいた。

マルケールは死んだのではない。正確にいえば彼は生きたのである。兄マルケールの姿は、光の中に包まれた美しい情景の中に、その遺された珠玉の言葉の数々とともに、幼いゾシマの心の奥に静かに秘められていった。そして後年、ゾシマの人生の途上である日、突然生命を得てよみがえる。

(B) ゾシマ長老の人生における聖書

ゾシマの回想の叙述は続けて、幼年期の宗教との出会いについて語られる。それは八歳の日に、母親と訪れた礼拝堂での光

景であつた。

明るく澄んだ日で、今こうして思ひだしていても、香炉からかぐわしい煙が立ちのぼつて、静かに上に舞いあがつてゆき、上からは円天井の小さな窓を通して、教会の中にいるわれわれに神の光がさんさんと降りそそぎ、香の煙がその方へのぼつてゆきながら、光の中に融けこむかのようであつたのが、あらためて目のあたりに見える心地がする。わたしは感動して見つめ、生れてはじめてそのとき、神の言葉の最初の種子を、自覚して心に受け入れたのだつた。

ゾシマの場合には、宗教の最初の種子が、言葉や文字ではなく印象として、しかも敬虔な佇まいとして、時に香りさえたずさえて、魂にふり蒔かれていった。もとより幼い八歳のゾシマにその光景を主観的に解釈する術はないであろう。概念ではなく現実として、内側からではなく世界の方から、深い意味を悟らないままに、いわば「純粹経験」として、深層へと覆隠されていった。

ここで私自身の幼少時の回想を語るのには恐縮であるけれど、私にとつての初めての宗教的体験があるとすれば、それは幼い日に祖母と過ごした朝の光景である。祖母は毎朝、仏壇の前で手を合わせるのを日課としていた。祖母は半ば規則的に、でも実に心を込めて、祈祷を準備していた。仏壇に置かれる供物は日々新しく異なつたと記憶している。私はもう少し成長してから、祖母が合掌の彼方に念じているのは、七歳で夭折した自分の娘の姿だと、母から聞かされた(母の妹にあたるはずの人物であつた)。

祖母が指にりん棒を摘まみ、椀型の小さな鐘の端にそれが触れると、一瞬に空気が厳肅に強張るのを感じた。蠟燭の淡い炎が音もなく揺れるさまと、鐘音の残焰が部屋末梢に染み入り、消えゆくまで瞑目していた祖母の横顔は、何かとても厳肅で靜謐で、諦めにも似た、重い濃縮した寂寥感を、私の心の底に様々に沈殿させた。幼い私には、時に意味の分からない小さな戦慄ともなつた。祖母は私が小学校六年の時に亡くなつたが、逝去直前の混濁した意識の中で、その幼い姿の記憶しかないはずの娘の名前を、小さな声音で何度も繰り返していた。修羅を燃や

すというのは、この場合の適切な言葉ではない。しかし子供を持った経験のない私にも、子を思慕する親の強烈な情念の様を、思い知らされたような気がした。

でもこの拭い去れない感情に、少しでも希望的な解釈が許されるなら、愛とは悲しみを含むことで、いつそう感慨を増すものだと思う。それは出会いの感慨が、いつもその彼方にある別れの悲しみを含意するように。「悲しみとは、愛（かな）しみでもあり、愛の発見である」（若松英輔）と思うし、また「いろいろのかなしみも、みんなおぼしめし」（宮沢賢治）なのだろうか。

宗教とは一体何であろうか。神などというものは、死を恐れる人間が作り出した、何の論証もないたの幻にすぎない形象ということであろうか。あるいは追悼などという儀式も、自分より先たつた者たちへの拭い去れない感情へのコンソレーションが生み出した、あくまでも生者のための儀式に過ぎないのだからか。愛する者の死という、人にとって、この最も理不尽なものを、何とか有意味化することで、行き場のない残された

人間たちの無念を何とか慰藉したい、ただそれだけのむなし所作なのであるか。哀悼とは実は死者たちではなく、残された人間たちに向かっている。

しかしここで、宗教にさらに一つの側面を提示できるとすれば、自分より偉大なものを直観する作用といえるだろうか。自分より偉大なものを感じるという意味は、あくまでも自分を相対化するという意味であつて、少なくともそこに自分を解消するという意味ではないであろう。

永遠を信じるという意味は、自分の生命に限界点をもうけないということであろう。死の壁によって断絶している生の中では、限定された恣意的な生の肯定だけが行われる。しかし生の充実を感じる瞬間に、実は人は死など意識しないものだ。

宗教を何の疑いもないままに受け入れる人はもちろん、それを単純に否定する人も、同じく思考停止をしている、と私は思う。宗教に無関心というだけでは、つまりは「無宗教」というだけであつて、恐らくそれは「無神論」でさえもない。それは宗教を論じているわけではない。そのような人たちは、宗教の実生活における弊害論もしくは効用論を述べるだけがせいぜい

であり、あのルソーの「市民宗教」(La Religion du Citoyen) などといった概念も、結局のところ宗教を方法論としてしか捉えていない。「宗教は阿片」(マルクス)といった人の思想も、結局はイデオロギー化(つまりは「宗教化」)してしまい、外形は宗教と何ら変わりのないものとなってしまう。宗教を否定するだけで、宗教というものの本質への探究が、ひいては人間への考察が欠けていたことの逆説的な皮肉だと思う。

誰の言葉であるかは失念したが、「疑いこそが宗教を洗練させる」と言った人がいる。それは端的に言えば、神の存在への疑いが、パラドキシカルに宗教を発展させるという意味である。だからこそ宗教の歴史とは、ある意味、神の不在と人類の苦悩が、神への愛慕と賛美とに対し、さながら合わせ鏡のように映じ、また交錯する。それは、『旧約聖書』然り、『新約聖書』もまた然りである。生とは、死とは、という問題が人間本性の奥に疑問形で探求され、その度合いに応じて神というものがいつそう繊細に彫琢されていったのではあるまいか。しかもそれはいつでも解答を与えたというより、解答を示唆したというくらいで、人間を絶望させつつまた希望も与える。

この何年か、NHKのE.T.Vで、「宗教二世」といわれる子弟たちの苦悩にスポットをあてていた番組を何度かみた。そしてついには悲劇的な事件も報じられた。宗教が信者たちの間で、「道具的理性」(instrumentale Vernunft ホルクハイマー)ならぬ、「道具的宗教」と化してしまい、信者たちは教義に奴隸化され、またそこに安寧を求める。「安息日(律法)は人のために定められた。人が安息日(律法)のためにあるのではない」(『マルコ』による福音書 第二章第二十七節)というあの古典的な措辞は、今こそ蘇る(とすれば、国家も国民のためにあるのであって、国民が国家のためにあるのではない、ともいえる)。全体主義社会において個人が責任と不安を権力へと解消するため、いとも簡単に「自由」を捨ててしまうのと実に類似した現象が、カルト教団の人間関係にも看取される。純粹な「信者」たちは、一人の俗物まるだしの「教祖」の与える「解答」のみに束縛され安住してしまうのだ。しかし生命と宇宙への問いは、どこまでも疑問形であるはずであり、少なくとも人間に「解答」を導き出せるはずもない。

『カラマーゾフの兄弟』の中に、「大審問官」と題された一

章がある。十五世紀のセピリアに基督が突如再臨し、人々を訪ね歩く。しかし当地の枢機卿である大審問官は、基督を捕え牢獄に閉じ込めてしまう。大審問官曰く、「人間はお前など必要とはしていない」、「お前を火焙りにしてやる」と。人間は選択の自由には堪えられないのだ、進んで自由を捨てる人間はお前の言う自由など欲してはいない。だから大審問官は、民衆に「自由」を与える代わりに「解答」を与えてやったのだと（大審問官の執拗な詰問に対し基督は微笑したまま何も答えようとはしない。大審問官の話を聞き終えた後、やおら立ちあがった基督は大審問官に優しく接吻する）

またわが国のように、「宗教法人」というものが存在し、しかも「公益法人」として税制優遇を受けるという問題への憲法上の疑義については、別論として考察が必要だと思う、M・ウエーバーの述べるとおり、組織は巨大化し安定すれば、上意下達の官僚システムに陥り、個人は組織の歯車となつて、ひたすら責任を回避しようとする。人間を問うことに宗教の本質があるとするれば、その問いにはいつも緊張をはらむ。しかし硬直した組織の中では、真剣な問答など行われるはずもないであらう。

教団としての宗教のあり方を決して否定するものではないが、信仰とは一人ひとりの内面の決断の問題であることは、見過ごしてはならないであらう。

ある婦人が、晩年のゾシマ長老に神の存在への疑念を吐露する。ゾシマは次のように答える。

「何一つ証明はできませんが、確信はできますよ」「実行的な愛をつむことによつてです…（中略）…愛をかちうるにつれて、神の存在にも、靈魂の不滅にも確信がもてるようになることでしょう…（中略）…これは経験をへた確かなことです」……。

インドの聖人ラーマクリシュナは次のように述べたという。「道はさまざまであっても、真理は一つである」と。

(C) 俗界にあったゾシマ長老の青年時代と青春の思い出。

決闘

さて青年期を迎えたゾシマは、ペテルブルグの幼年学校で八年間を過ごした後、血気盛んな若者として、軍籍に身を置く人間として登場する。彼はいつの間にか、軍人としての世俗的な名誉を求めるような、連隊の名誉のためには、血を流すのも厭わない人間となっていた。しかも素行の悪さでは、「わたしがいちばんだった」。

このようなゾシマの前に、さる若い美しい令嬢が現れる。ゾシマは自分の一方的な恋慕でないことを確信しつつ、心なしに適当に彼女を煽りつけつつ、そのまま二か月間の出張の旅に出る。ところがゾシマが帰宅してみると、令嬢はすでに別の男と結婚していた。しかも相手の男は、実はかなり以前から令嬢の婚約者であったことを、ゾシマはこの時に初めて知らされる。全てはゾシマの野暮な誤解に過ぎなかったのだ。しかしゾシマの羞恥心は、やがて憎悪へと変わった(以上、恋愛事情につきましては、私は経歴不足のためよく理解できないところがあります)。

ゾシマは夫となった男を、ある席で故意に侮辱し、ゾシマに対して決闘を申し込むように仕向けた。彼は「ついにには見苦し

い愚かな人間になってしまった」のだ。決闘は六月の終わりに近い、とある朝で、場所は郊外と決まった。介添人は軍の友人だった。

決闘の前夜、軽い焦燥感に襲われたゾシマは、自宅で従卒のアファナーシイを理由もなく二度も殴りつけ、顔を血だらけにさせた。

「首をまつすぐに起し、目を大きく見はって、殴られるたびに身をふるわせはするものの、手をあげて防ごうとさえしない」、「こんな野獣のような残忍さで殴ったことは一度もなかった」。実はここで、召使にぞんざいな態度を取っていた、幼い日の、病を得る前の兄マルケールの姿が、ゾシマによって無意識のままに、乱暴に演じなおされている。

しかしそこへ思いがけない、傾覆する事態が、ゾシマに生じ

翌早暁、薄青い静寂の中、ゾシマはベッドで覚醒する。ゾシマが部屋の窓の扉を開けると、扉に面した庭から、端なくも小鳥たちの囀りが聞こえ始める。そして彼の部屋を、東から昇り始めた朝陽がゆつくりと照らし始める

部屋を充たす朝の光と小鳥たちの歌声は、遙かな遠い幼い日に、永訣へと近づく兄マルケールの部屋での光景そのままである。旭日の光に、剥落し憔悴しきつたゾシマの影が醜く映する。この時、永遠なものとの世的なものが触れ合い、一方が他方を浄化していく。

「心の中に何か恥すべき卑しいことがあるように感ずるが、これはどういうわけだろう、とわたしは思った。これから血を流しに行くせいだろうか？いや、どうもそのせいではないようだ」

「太陽がかがやき、木の葉はよろこびきらめき、小鳥は神をたたえている……わたしは両手で顔を覆うなり、ベッドに倒れ伏し、声をあげて泣きたした。そしてそのとき、兄マルケールを、そして死ぬ前に召使たちに言つた兄の言葉を思い出したのだつた」

兄マルケールの臨終の美しい姿はゾシマの心の中に隠れた現実として保存されていた。美しい自然は実は内面の反映であり、

兄の思い出の背景として象徴的に奏でられる。いな象徴ではなく、それもそのまま実体なのかもしれない。

それはさながら偉大な音楽の旋律が心の奥底に刻みつけられ保存され、後の思いがけない人生の風景の中で忽然とその楽想を奏で始めるように。そして、それが人生の真実の一片を語るものであることが実感されるように。あるいは持続低音の変化が、後の縦軸の主題に全く新しい意味を与えるように

巨匠リヒャルト・ワーグナーの生涯最後の作品となつた舞台神聖祭典劇『パルジファル』の、その終幕の冒頭は、聖金曜日朝の場面である。聖金曜日朝の曙光が降りそそぐ中、野を爽やかに渡る風と、咲き誇る無数の花々に囲まれて、救済と赦しの予告が語られる。美しい自然が内面の反映であるとすれば、その音楽は琴線が奏でるものとなる。しかも基督が磔刑に処せられた日であるはずの音楽は、ここでは受難曲でも鎮魂曲でもなく、つまり悲しみでも痛みでもなく、抱擁し優しくいたわるような音楽へと昇華されている。パルジファルの疑問に、グルネマンツが答える。

「そうではないのです。罪人の悔恨の涙が、今日は神聖な露

とともに、野や原をうるおして、このように茂らせるのです」

溢れ出る感動を自ら冷静に確かめつつも、いつも私は、どうしてもそれを胸に抑え得ない。そんな感慨に浸りつつ、毎回、落涙を禁じ得ないところであるけれど、私は巨匠の畢生の音楽が、『カラマーゾフの兄弟』のこの場面に共振するのをいつも感じる。

従卒を殴る自身の姿と、昨晚までは怨嗟に心をふるわせ人を殺しに行こうとしていた自らのささくれ立った心、そこに兄マルケールの優しい眼差しが通り過ぎていく。激しい内面的緊張と相克のすえ、内なるマルケールは、ついに弟に打ち克った。勝つたのではなく、和解と赦しが訪れたのである。

ソシマは、昨晚、暴行をほしいままに加えた従卒の前で、地べたに額をすりつけた。「赦しておくれ！」。それは同時に兄マルケールへの謝罪だった。従卒も泣いていた。ソシマは和解したのだ（作品では、後に修道者となったソシマが、行乞の道端で従卒夫婦と再会する場面がある。当作品の感動的な場面のひとつとなっている、と思う）

そして朝の決闘の場で、ソシマの銃弾は虚空へと放たれた。

「おねがいです、愚かな青二才のわたしを赦してください、自分がわるいのにあなたをさんざん侮辱したうえ、今は人を撃つようなことをさせたりして。わたし自身はあなたの十倍もわるい人間です。いや、おそろしくも悪いでしょう。このことを、あなたがこの世でだれよりも大切にしていらっしやるあの方に伝えてください」

そしてソシマは殺すはずだった男の前で次のように告げる。

「人生が楽園であることを理解していません。理解しようという気を起しさえすれば、すぐに楽園が装いをこらして現われ、わたしたちは抱擁し合って、感涙にむせぶのですよ……」

これは臨終の際の兄マルケールの言葉の、そのままの復誦である。

「決闘の場に臨んで詫言を入れるとは、なんたる連隊の恥辱

だ」と、介添人は怒り始めた。「軍服の名折れた。辞表を書かせろ」、後日、軍人の仲間の中にはそう叫ぶものもあつた。

しかしソシマは、連帯の名譽、社会的な名声、この世的な評価を断然放棄した。名譽や名声など陽炎の如く失われるものを、決然と破棄した。

爾來、世間ではソシマへの嘲笑と侮蔑の音があふれた。しかしソシマがかつて愛した女性は、彼に歩み寄り次のように述べた。「失礼でございますが、わたくし、あなたを笑つたりしない最初の人間であることを申しあげます。それどころか、あときのあなたの行為に、わたくし涙ながらに感謝して、敬意を捧げております」。彼女の傍らには夫もいた。ソシマはいつたん失つた人々の愛を勝ち得た、再び取り戻したのである。

この愛はもはや現世的な自「」を起点にしか転回しない愛とは明らかに異なる。今、ソシマの人生の行程には新しい扉が啓かれようとしている。しかし彼がその扉を開くためには、いまひとつの契機を必要とした。そんなソシマの姿を一人の紳士が見つめていた。

(D) 神秘的な客

「神秘的な客」とソシマによつて異名された、本名はミハイルと名乗るこの紳士は、名望家あるいは篤志家として、町の皆から崇敬をもつて迎えられる人物であつた。「養老院や孤児院に巨額の寄付をし、そのほかにも、数々の善行を匿名でひそかにしていたことが、死後すべて明らかにされた」という。そんなミハイルが、夜な夜なソシマのもとを訪れる。

彼は訪れた理由を鹿爪らしく言う。「あなたが自己の真実のために、みんなから一様に軽蔑される危険をおかすような問題で、真理に奉仕することを恐れなかつたからです」、「決闘場で赦しを乞おうと決心なされた瞬間、いったいどんな感じだったか、もし覚えていらしたら、お話しただけませんかでしょうか？」

ソシマは「決闘」に至る前の秘匿していた事情を明らかにしていった。ミハイルは明らかにソシマとの間に、自分との通有点を探しているようであつた。とすればこのロジックの極点は、ミハイルにも秘匿している何かがあるということになる。ソシマは、「決闘」の事情をミハイルが尋ねているのは、彼の方便

であることを直観する。「男の心の奥に何か特別な秘密が存するのを感じたからだ」、「この人はきつとわたしに何かを打ち明けたいのだ」。

ミハイルの逡巡するかのような情調は、何らかの忍事を秘めていることはや明らかであつた。言い淀むままにミハイルは、毎夜、ソシマの宅を辞す。しかしある晩ついに、ミハイルは告白を始める。

「どうしたんです」わたしは言った。「気分でもわるいんじゃないませんか？」

ちやうど彼は頭痛を訴えていたところだつたのだ。

「わたしは……ご存じないでしょうが……わたしは……人を殺したのです」

こつ口走ると、微笑した。顔が真っ青だつた。なぜ微笑したのだろう、何か思いめぐらす前に、こんな考えが突然わたしの心を刺した。わたし自身も蒼白になつた。

「何ですつて？」わたしは叫んだ。

ミハイルが告白したのは十四年前の殺人であつた。ラスコーリニコフのソーニャへの告白（『罪と罰』）、スタヴローキンのチーホンへの告白（『悪霊』）、罪禍と救済のテーマは、作者の最後の作品に、最も純化され、いな最も深刻なかつたで、三たび登場した。

ラスコーリニコフにとつて、世に微塵の利益さえも与えない強欲な金貸しの老婆を惨殺するのは合理的で、それは自己の確信の実践でもあつた。スタヴローキンにとつて幼女を誘惑し痴情に陥れるあり様は、ただ灰色の倦怠を紛らわすにすぎない所作だつた。両者の基底には愛は寸毫も存在しない。

しかしミハイルの場合には、前二者とは、大きく局面を画する。殺人の、すなわち罪の対岸に、愛がわずかだが曙光を映じている。罪と愛が両極に、最も深刻なかつたちで分裂している。殺人者ミハイルには、愛する妻と幼い子供たちがいたのだ。

過去に横恋慕した女への憎悪（ミハイルが殺害したのは一方的に愛情を寄せた婚姻間近の女であつた）と、目前の妻子への愛（私には認識不能ではあるが）が、相克する。恣意的で最もおぞましいものと、無縫で最も純粹なものが、深刻に対峙す

る。この現実、ミハイルを彼の内面に絶対的に孤立させた。

「だが『わたしにはその子たちのあとけない、晴れやかな顔を見ることができない。そんな資格はないのだ』」

「『このひそかな苦しみですべてを償おう』しかし、この望みもむなしかった。日を追うにつれて、苦悩はますます強くなるばかりだった」

苦悩の主観的忍従や主観的甘受が罪禍を贖うのではない。また罪とは量ではなく質であり、いかなる社会的善行も徳行の積み重ねも、罪の質を減じることではできない。

罪の現実、どのような意味においても主観的な認識の中に還元し、あるいはエポケー（判断中止）として認識外におくこともできない。一つの実体として人間の主観的操作を超えるものである。あるいは罪は絶対に客体にはならない。

「正しい内的意味と方向とは、人間存在の閉鎖された孤立態からはけつして掘りだすことのできないものである」（森有正）。この時、人間存在への探求は深く穿孔しつつ、しかし次第に内

面を狭窄し自らを焼き尽くす。魂は明らかに自己自身からの解放を求めている。

「人間は精神である。精神とは何であるか。精神とは自己である。自己とは何であるか。自己とは自己自身に関係するところの関係である」というキルケゴールの『死に至る病』の冒頭部分の言葉を、ドストエフスキーほど深く、これを文学的に表現し得た人はいないように思う。「キルケゴールの『死に至る病』をドストエフスキーの作品の注釈として読む」（木田元）という文章を後に読んだ時、私は大きな共感を感じずにはいられなかった。

ミハイルはゾシマに殺人を告白した。このち、彼はすべてを失うであろう。しかしこの瞬間、少なくとも彼は孤独ではなくなった、彼はもう一人きりではないのだ。

罪は告白によつて罪性を失う。赦しによつてその本質が溶解する。暗闇からさらけ出され、その漆黒の呈色は消滅する。

赦しは他者との関係のみにしか成立しない。罪は他者との関係の中で揚棄され、新たな愛の現実へと止揚される。

「わたしにとって楽園が訪れることはわかつています。

告白すれば、すぐに訪れることでしょう。十四年というものは地獄の暮らしでした。わたしは苦しみたい。苦悩を背負って、真の人生をはじめますよ。嘘でこの世を渡りぬいたら、あと戻りはできませんからね。今のままでは、身近な人はおろか、自分の子どもさえ、愛する勇気がないので……（中略）……神は力の中にはなく、真実の中に在るのですから」

「行つて告白なさい」わたしはささやいた。声がかすれたが、しっかりと口調でささやいたのである。

こののちミハイルはある招宴の席上、町じゅうの人たちのまえで殺人の告白を行う。彼はこの時、殺人の物証さえ示し、自らを背水へと追い込んだ。

「悪は善の欠如」(アウグスティヌス)であるとすれば、その深い意味において、罪とは愛の欠如であるともいえる。つま

り罪と愛とは別箇のものではなく常に相関関係にあり、現象的には相克しつつも、その本質においては通底するものである。その意味で、罪から愛への転換は、価値の転換ではなく、存在の転換である。

罪と愛が存在論的な差異にすぎないとするなら、贖罪の人生を送ることは、絶望の人生を送ることであるはずがない。むしろミハイルの新しい人生とは、再び幸福を求める生活ではない。罪人としての真の生活の開始である。いな、新しい愛の生活の開始である。

しかしミハイルにはその時間は残されてはいなかった。知己のあまたの人たちの前で告白を終えた後、彼は精神錯乱に陥り、それは彼の肉体をも冒した。ミハイルは間もなく死の床へと就く。しかし彼の魂は歓喜に充ち溢れていた。

「神さまがわたしを憐れんで、おそばによんでくださっている。もうすぐ死ぬ身であることはわかっているけれど、永い年月のあとではじめて喜びと安らぎを感じているんだ。せねばならぬことをやりとげただけで、いつぺんで心の中

に樂園を感じたんだ。今なら子供を愛し、子供たちに接吻してやることだつてできる」

ミハイルは、枕元に顔を寄せたソシマにそのように語つた（ミハイルの告白は結局、心の混濁が引き起こした虚言と判断され、有罪は宣告されなかつた。その一週間後、ミハイルは息を引き取つた。

ソシマが修道生活に入つたのは、それから間もなくのことであつた。ソシマは、ミハイルのその偉大な苦悩をたたえて、遺記に「わが師ミハイル」と記した。

修道生活とは何であるうか。欲望を枯渇させ、ひたすら禁欲生活を送り、俗人が達し得ない境地に達することであるうか。

でも、この「境地」のどこかに、自らが精銳であることの矜持が伏在していないだろうか。「隠れて生きよ」というが、「隠れて生きる」人間が少数でなければ、そもそも有意義性はない。

この言説にも、実は俗世にとどまる人間たちへの軽侮が潜んでいる

ソシマが歩みを進めた修道生活とは、単なる隔世とは相違する。したがつて、彼が意企する人間とは、自身への規律に溺れるだけの人間、あるいは観想のみに閉鎖する人間、そして苦行に囚われるのみの人間、そのような人間たちとは徹底的に対峙する。修道生活とは、現し世と隔絶し、遁世生活を送ることではない。したがつてそれは、「東洋的諦観」などというものは、断じて意味を異にする。「人生とは偉大な喜びであつて、忍従の涙の中にあるのではない」「真実で美しいものはすべて寛大さに充ちている」「人を愛する者は、人の喜びをも愛する」(ソシマの言葉より)。

だからこそソシマは最愛の弟子であるアレクセイ・カラマーゾフに僧院を出て、世界に踏み出すことを勧めるのである。それは信仰を断念するという意味ではない。

「大勢の敵を持つことにならうが、ほかならぬ敵たちでさえ、お前を愛するようになるだろうよ。人生はお前に多くの不幸をもたらすけれど、お前はその不幸によつて幸福になり、人生を祝福し、ほかの人々にも祝福させるよう

になるのだ」

一貫した発展的な自己形成ではなく、他者との交渉の中で自分が更新されていく。それは隔絶した生活のもとではもたらされない。

ゾシマの修道生活とは、人生の営みを祈りの生活の中で回顧し、愛の現実を見い出すために。アレクセイのこれからの新しい生活とは、祈りの日々で垣間見た愛の現実を、人生の道すじの中で確かめるために。

三 それから

遺稿をアレクセイに託して、ゾシマ長老は間もなく、静かに息を引き取った。

当時のロシアの地方では、聖人の遺体は腐敗せず、芳香さえ放つなどという素朴な信仰があった。こういつた信念は、こんにちでは実に滑稽なものであるけれど、まことしやかな聖人の記録が、それが漠然としたものであるがゆえに、いつそう神秘

なものとして伝えられていた。ところが、ゾシマの遺骸は半日もたたないうちに、腐臭を放ち始める（遺体はギリシャ十字架のついた頭巾を頭にかぶり、柩の蓋は開けたままになっている）。民衆のゾシマ長老への尊崇は、群集心理の効果も相まって、実に簡単に侮蔑へと変わる。奇蹟を期待した憐れな民衆の中には、行き場のない失望から、ゾシマを罵倒する者たちまで現れた。この混乱の中で、アレクセイの気持ちも大きく揺らぐ。ゾシマの遺骸の腐臭が漂う中、何の変化もない、庸劣な日常の時間だけが過ぎていく。そして半ば放心するような足取りで、アレクセイは僧院から這い出し、彷徨い始める。

しかしここから、『カラマーゾフの兄弟』中、恐らく最も感動的な場面（と私が思う箇所です。大学からの帰宅途中の電車の中で読みながら人目も憚らず泣いてしまいました）へと、ストリーは展開する。

自棄を覚悟したアレクセイは、ある手引きによりグルーシエニカのもとを訪れる。このグルーシエニカは、近傍では「ソドムの悪女」と蔑まれた女だった。何人もの男たちが、この女の周辺を出入りした。そしてその男たちが彼女に求める関係とは、

当然のように常に身体の関係であり、グルーシエニカの風を切るような、あるいは居直ったようなその虚勢とは裏腹に、その内面には、ぼろぼろに蚕食された彼女の心の深い悲しみが潜在している。

ここに今、打ちひしがれた純真な修道士アレクセイ・カラマーゾフと、「淫猥な」女グルーシエニカが邂逅する。全く別のベクトルを指向していたこの二人が邂逅する。これこそがドストエフスキー作品のダイナミズムだと、私は思う。

それはさながら『罪と罰』のラスコーリニコフとソーニヤと、あるいは全く相反する二人が邂逅するように。自己のセオリーに従って冷徹に殺人を行ったラスコーリニコフと、家族を養うために日次に春を売るソーニヤ。「倨傲と謙抑」(ジツド)、自己愛と自己犠牲、そして他者への殺人と自己への殺人……・ヤスパーズの「コムにカチオン」(communication=実存的交わり)は、ドストエフスキーの場合は、いわば絶対的他者とおしが織りなす精緻なテクスチュアと、その高次に昇華されたソノリテイである。

グルーシエニカはアレクセイの膝の上に座り、首を抱き、酒

を勧める。「この《恐ろしい》女」による誘惑が始まったのだ。

「アリオシヤ(アレクセイ)、ねえ、こうしてあなたを見ていても、また信じられないの。ほんとにあなたが家に来てくれるなんて！」

しかし、ここに「奇蹟」がおとずれる。

不意なことからグルーシエニカは、アレクセイの敬愛していたゾシマ長老の死を知る。

「ゾシマ長老が亡くなったの！」グルーシエニカが叫んだ。「まあ、そうとは知らなかったわ！」彼女は敬虔に十字を切った。「まあ、それなのにあなたにはなんてことを。今この人の膝にのったりして！」ふいに怯えたように叫ぶと、急いで膝からおり、ソファに座り直した。アリオシヤ(アレクセイ)はおどろきをこめて永いこと彼女を見つめていた。その顔が明るくかがやきはじめたかのようだった。

グルーシエ二カのアレクセイへの憐憫 たったそれだけのことだった。作品では「一本の葱」と表現された、こんな小さなたった一茎の希望が、今、この二人を結んでいく。アレクセイは絶望の淵で、「二本の葱」をしつかり掴んだのだ。

最も尊敬した師との永訣、しかも愛情と崇敬の源泉だった師は、ただの腐った肉塊へと成り果てた。しかもその腐塊には罵声の唾さえ浴びせられた。アレクセイの信念は瓦解し、全てがアレクセイに背を向けた世界の中で、彼はたった一人取り残された。それは彼の信ずる神の存在そのものへの疑惑へと向かう。そんなアレクセイにグルーシエ二カが憐憫の情を寄せるのは、なぜなら彼女も、愛し信頼を置いたはずの男から弄ばれ、汚穢のように棄てられたからなのだ(男はグルーシエ二カを弄びつつ平然と別の女と関係し、当然のようにその女と婚姻していた)。人を信じるという、人間にとつて最も安心できる、何の理由付けもいらぬこの最も美しい心の綾織から、彼女はいつも疎外されて生きてきた人間なのだ。

「ところが僕は誠実な姉を見出しただよ。僕はあな

たのことを言ってるんですよ、グルーシエ二カ。あなたは今、僕の魂をよみがえらせてくれたんです」。

グルーシエ二カが罪深い女だというなら、彼女こそが赦され愛を受けるべき人なのであろう。「赦されることの少ない人は、愛することも少ない」(『ルカによる福音書』第七章二十六節〜五十節)。売笑婦マグダラのマリアの涙を見つめながら、基督は何を言いたかったのであろうか。罪は赦されてこそ愛へと転換する。言い換えれば、人は赦されてこそ、今度は人を真剣に愛することができる、ということなのだろう。愛とは主観的な判断や決意が生み出すものではない。ましてや教示や修練によつて獲得される人間の善良な一状態ではない。他者との関係のあり方そのものの中に成立する存在の姿である。「人が他の人に親切にするのは、かれのなかに親切をなしうる性質、親切をなしうる自由があるからではない。愛の現実そのものが他に對する公正なる態度を本質的に要求し、それを自覚した人は、それを実践せざるをえないのである」(森有正)。

今度はその「一本の葱」をグルーシエニカが握る番である。

「あたし、これまでずっと、あなたのような人を守っていたのよ。だれかそういう人が来て、あたしを救ってくれて、知っていたわ。あたしみたいな汚れた女でも、きつとだれかが愛してくれるって、信じていたのよ、淫らな目的だけじゃなしに!」。

「僕が何をしてあげたというんです!」とアレクセイは応える。「あたしを、姉とよんでくれた……」。

「ソドムの悪女」と蔑まれたグルーシエニカの魂は原初の誠実さへと回帰する。真珠の珠のような美しい涙がグルーシエニカの頬を伝う。

かくして「神の存在への確信は、実行的な愛の交わりとその果実の中に」というゾシマの遺言は果たされ、アレクセイは新たな力強い信仰の確信を得る。

作品はここで全体の折り返し地点を迎え、ここから作品中葉

のクライマックスを迎える。

アレクセイは静かな夜の僧院へと戻る。師の遺骸の腐臭はさらに空気に深く染み込み、濃縮していた。しかしアレクセイは、もはや従前の彼ではなかった。彼は柩の前にひざまづいたまま、静かにまどろみ始める。

アレクセイの夢の中に、「カナの婚礼」(『ヨハネによる福音書』第二章)の幻影が現れる。基督が、この地方で最も貧しい人たちが住む場所での、婚礼という小さな幸せ(私にはよく分かりませんが)の場所に招かれている。基督は、新郎新婦と家族たちのために、かめに満たされた水をぶどう酒に変える。そしてその祝宴の席には、ゾシマ長老もいた。ゾシマ長老はアレクセイに歩み寄り、次のように述べる。

「お前も、もの静かなおとなしいわたしの坊やも、今日、渴望している女に葱を与えることができたではないか。はじめるがよい、倅よ、自分の仕事をはじめるのだ、おとなしい少年よ!」

夢から覚醒したアレクセイは、目の師の遺骸をしばらく見つめた後、向きを変え、僧院の外へ飛び出して行った。胸いっぱい溢れた感動の行き場を求めて、またその意味を確かめるために。作者は美しい言葉を散りばめて、この深夜の情景を表現する。

歡喜に充ちた魂は自由を、場所を、広さを求めていた。

頭上には、静かな星をこぼれるばかりにちりばめた空の円天井が見えるかすかなたまで広々と打ちひらけていた。天の頂から地平線にかけて、まだおぼろげな銀河がふた筋に分れて走っていた。動き一つないほど静かな、すがすがしい夜が大地を包み、教会の白い塔と金色の円屋根がサファリア色の空にきらめいていた。絢爛たる秋の花は建物のまわりの花壇で朝まで眠りに沈んだ。地上の静けさが空の静けさと融け合い、地上の神秘が星の神秘と触れ合っているかのようだった……

さらに、作者は続ける。

彼の魂全体が《ほかの世界に接触して》、ふるえていたのだった。彼はすべてに対してあらゆる人を救済したいと思ひ、みずからも赦しを乞いたかった。ああ、だがそれは自分のためではなく、あらゆる人、すべてのもの、いつさこのことに対して赦しを乞うのだ。

このフレーズは作品中に、個々の言葉は変化するが、これまで何度も登場していた。そして、

大地にひれ伏した彼はかよわい青年であったが、立ちあがったときには、一生変らぬ堅固な闘士になっていた。

ここに、イースト・プレス刊『まんがで読破 カラーマゾフの兄弟』という本（コミック本）がある。私には、この大著を漫画で読むなどというのは、当初は失笑よりも、その安易さに唾然として自失してしまいそうな感があった。しかしページを

繰り、先ほどの星空の場面と思われる箇所にかきかかった際に、私はそのモノクロのプリントから、何かとても清爽な大気の感触を感じた。少し照れくさそうなアレクセイ（原作とはかなり違つ）が、星々を見上げている。そして星々の間を縫つように、次のような文章が挿入されていた。

「星たちはいつでも同じように美しく輝いています……。僕たちはそこに神秘を感じずにはいられないのです。過去も未来も遠く離れた人も……同じ星々を見て同じことを感じるのです。う。神秘とは何も特別なことではないのです。ふとした瞬間に僕たちは気づかされます。かけがえのない大切なことに。忘れないでください。みんな一緒に生きていくのです」。

私の所持している新潮文庫の翻訳には、このような訳文はどこにも見い出せない。このカリカチュアを編集した誰かが、このような美しい文章を添えたのであろう。私はその遠い誰かに、今この瞬間にも、共時性を感じずにはいられない。

ドストエフスキーの『罪と罰』と『カラマーゾフの兄弟』の関係は、作曲家ベートーヴェンの交響曲第五番「運命」と交響曲第九番「合唱」の関係に類比されると言った人がいる（とい

うことは『罪と罰』を読んでも『カラマーゾフの兄弟』を読んでいるとすれば、「運命」は聴いたが「合唱」は聴いていない、ということと同じになるのであろうか）。

もしベートーヴェンのこの二つのシンフォニーの関係を、ドストエフスキー的に解釈するとすれば、「運命」における自己自身との戦いは、「合唱」において自己自身からの解放へと止揚されたと考えるべきであろうか。失聴の進行は作曲家を内面へと閉鎖させたが、晩年に向かいその孤独を打ち破り、ベートーヴェンは再び人間とおしの輪の中に戻つて来たのだ。今、ここに、音楽芸術が生んだ最大の創造が生まれ出づる。

実は「合唱」（『カラマーゾフの兄弟』？）の終楽章の後半部分も、音楽の背景は満天に輝く星々である。「互いに手を取り合おう！」(Seid umschlungen)と、シラーの詩に仮託した全響の楽聖は、その確信と同意を円天の星空に呼びかける。感動的な二重フーガの後、「すべての人々はいつの日か必ず兄弟になる……」(Alle Menschen werden Brüder……)と、四重唱が静かに祈りをこめる。そして曲には再び合唱が加わり、全オーケストラとともに終結部へと向かう。「全世界に！」

(Der ganzen Welt)」 憑かれたように同じ言葉が繰り返される。

「だれかがあのとき、僕の魂を訪れたのです」と、アレクセイは星空に身を浸したあの日の晩のことを、後に振り返る。言い換えれば、これがドストエフスキーなりの宗教的確信ということになるであろう。ドストエフスキーはどこまでもキリスト教を背景にした作家であり、生涯キリストの意味を問い続けた。「たとえあなたが私を見棄てようとも、私はいつでもあなたそばにいる」(遠藤周作)。

アレクセイは、「俗世にしばらく暮すがよい」という亡き師の言葉に従い、僧院を後にする。

「正しく生きるとは銀河系を自らの中に意識してこれに応じて行くことである」 宮沢賢治『農民芸術論綱要』より

四 おわりに く希望の書く

『カラマーゾフの兄弟』は実は未完成の作品である。作品は

完成をみることなく、ドストエフスキーの五十九年の生涯はここで断ち切られた。作者の無念は想像に難くない。従来、未完成の作品というものは、例えば夏目漱石の『明暗』のように、不承不承な口惜しい感を読者に残す反面、その後の展開について読者にはさまざまな嬉々たる想像をかき立てるものであるともいえる。しかし『カラマーゾフの兄弟』の末尾が呈するものは、件の未了の作品が与える読後感のようなものとは、やや趣を異にするように思う。音楽でいえば、J・S・バッハの未完の遺作「フーガの技法」が唐突にブラックアウトするような感覚は、少なくとも『カラマーゾフの兄弟』の掉尾にはないと思う。

この作品の「ラスト」は、アレクセイ・カラマーゾフと彼を囲む少年たち、そして彼らの幼い友人イリュエーシャの埋葬の日の朝の光景である。そしてこの少年たちの中には、作品後半から登場するコリヤ・クラソートキンという注目すべき一人の少年が含まれている。

このコリヤという少年は、不断に自己に対する関心を忘れ去ることができない人間である。自身の容貌に異様に執着し、

とりわけ彼は背が低いこと、鼻が小さいことが不満だった。その不満の字句は、作者によって微に入り細を穿つほどに細かい分析となった。そしていつも憤然として、コーリヤは鏡の傍らを去るのだった。またある時、彼は線路の上に横臥し、頭上を全速力で走る汽車を昂然と見届けてみせた。それは年上の友人

たちに奮勇を誇示してみせるためだった。不満と充足の波瀾の中で、コーリヤの感情は間断なく自己に向かつて集中する。すなわち、伶俐なこの少年の情念は結局のところ、自己省察を起点にしか展開しないのだ。そこに想像されるものは、いかに自分が見事に点出されるかであり、他のすべての人間たちは自己を引き立てるための走狗もしくはせいぜい背景の意味しか持たない。対他関係が、常に自己を起点にしか指向しない。コーリヤの他人に対する関心とは、常に延長された自己愛であり、他人を愛する愛ではなく、常に自己に還る愛である。人間関係を、自己を起点とした函数の中に置いてしまおう。つまりコーリヤという人間も、本質的には自己に閉鎖した人間なのである。

この幼い人格の中に、非常に素朴ではあるけれども、『罪と罰』のラスコーリニコフ、あるいは『悪霊』のスタヴローキン

の人格の、すでに小さな萌芽のようなものが直観できる。この祖型は、いずれ年齢とともに発展し、人生の諸価値を自覚的に踏みしめる。そして全てを眺め尽くし味わい尽くした後に、やがては訪れる倦怠の鈍重な泥沼の中に、彼は呑み込まれていくであろう。

『罪と罰』のラスコーリニコフは、根本的には自己不信に囚われた人物であつた。自己の定立した理論に忠実さを装うことで、自己不信を黙過しようとし、かえつて分裂が露わとなつた。セオリーどおりの殺人の挙行は、ラスコーリニコフなりに自己を「真の自己」とするためであつた。ところが確立するはずの自己は水飴のように揺らぎ、ますます不安が旋回し、眩暈にとらわれる。この姿は、自己が自己の中心になるはずであつた近代ヒューマニズム、あるいは近代理性主義の崩壊を、キルケゴール、ニーチェといった人たちとは別に、ドストエフスキーは文学的な観点から表現したものであろう。それは「ヒューマニズム（人間中心主義）の自己破壊的弁証法」とベルジャーエフが述べたものを、現象面で表現したものであるともいえる。内面に孤立した自己が、自己自身と直面して得るものといえは、自

己の完成ではなく、自己の崩壊であった。さもないければ「永遠の憂悶」にさいなまれ、自己は溶解していく。

自己の完成の断念は、さらには『悪霊』のスタヴローキンという狂気的人格を生み出す。彼は、自己を消費し浪費し尽くした人間が陥る倦怠とそれゆえの絶望的な無関心からの脱出路を求めて、数々の奇矯な振る舞いをみせる（目前の人間に不意に噛みつく、心身の病に冒された女との婚姻の敢行など）。スタヴローキンの自己愛は喪失の瀬戸際にあり、彼はそれを自嘲的に自覚している。そしてスタヴローキンの触手の極致は、幼女マトリョーシャの陵辱へと向かった。そのプロセスはといえば、幼気な少女をして情欲へと誘因せしめ、しかもこの悪魔は途中で意識的に彼女の情欲を遮断させ、房事の責を彼女へと帰したのだ。「神様を殺してしまった」との言葉を遺して、マトリョーシャは縊死した。スタヴローキンはマトリョーシャが自死に向かう過程を、計画どおりに、冷酷かつ精刻に観察していた。「あえて二ヒリズムに陥りつつ死なずに生きることには、すでに人間として生きることではない」（森有正）。そのとおりにスタヴローキンは自殺して果てた。

ラスコーリニコフ、スタヴローキン、そしてキリーロフ（『悪霊』）、シャートフ（『悪霊』）、イワン（『カラマーゾフの兄弟』）、皆、自ら限定した生に生きようとして破滅していった。自己の判断と意志から自由になることが、彼らにはできなかった。人生の意義とは自己を中心にはかることはできないということであり、彼らの求めた「自由」とは、しよせん限定された生における人間的自由にすぎなかった。真に偉大なものは、自己の外側からの邂逅が導くことを知ることもないままに。

しかし、コーリヤはそうはならなかった。幼い友人イリュエーシャの「死」という、主観的操作においては、わずかな制御をも拒む圧倒的な現実。でもその現実にはコーリヤを圧倒したのではない。むしろ彼の内面に新しい生命を生み出したのである。コーリヤは自身を超えるものに初めて邂逅したのである。今ここに、新しい人生が始まる。

イリュエーシャの柩が運び出された後、部屋を飛び出したコーリヤは、アレクセイに次のように述べる。

「僕は全人類のために死ぬことを望んでいるんです。で

も、恥さらしなんてことは、どうだつて構いません、僕らの名なんかどうなつたつて構やしない」(この訳文のみ米川正夫訳。岩波文庫)

感情の発露のままに述べられたコーリヤの言葉は、自身とも自己愛とも決別し、コーリヤが新しい人生に向かつて力強く生まれ変わったことを含意しているのだと思う。コーリヤは死ぬとしてゐるのではない。生きようとしてゐるのである。

私はこの箇所を読むたびに、どこかで同じ意味の言葉を聞いたことがあるような気がしてならない。それは宮沢賢治の絶筆となつた『銀河鉄道の夜』の中の最後の一場面である。銀河鉄道が永遠の中に回帰する、まさにカンパネルラとの永訣を迎える直前、ジヨバンニは次のような言葉を投げかける。

「ほくはもう、あのさそりのように、ほんとうにみんなの幸いのためならばほくのからだなんか百べん灼(や)いてもかまわない」

北辺の地で、そして宇宙の彼方で、偉大な魂は時空を超えた共時性の中で呼応し、同じ結論へと帰着した。ドストエフスキーは福音書によつて啓かれ、賢治は法華経の導きによつて、探求の道すじは違つたが、両者は最後の作品で同じ真理へとたどり着いた。「ほんとうのさいわい」(宮沢賢治)への道は、作者の最後の作品で大きく開かれた。

この二つの偉大な魂が生涯にわたつて苦悶し続けた、この世の不条理と理不尽さ。善なくしては生きられず、しかも善を主張しようとする人は、そのことによつて、自己と他者に最大の罪を犯す(『白痴』等)。あるいは、一方の幸福が必ず他方の不幸へと背離する、この逃れ得ない摂理の現実(『なめとこ山の熊』等)。人は人生を真摯に歩むほどに、必ずこの不条理に直面する。

シエストフは、『悲劇の哲学』の中で、「ドストイェフスキーの小説とニーチェの書物は、ただ、『最も醜い』人々と彼らの問題について語つてゐるのだ。ニーチェとドストイェフスキーは、ゴーゴリ同様、日常的な希望をいだかなかつた最も醜い人間であつた」と、冷笑的に述べる。シエストフはドストエフス

キーの文学の底流に一貫して「ニヒリズム」が横たわると述べる。しかし果たしてそうだろうか（「ニチエはともかくとして」）。

『銀河鉄道の夜』を絶望や悲劇の文学と断するのが笑うべき無感覚であるのと同様に、『カラマーゾフの兄弟』をニヒリズムの文学と評するのは、私は誤りであると思う。現代ドイツの哲学者ヴィトゲンシュタインは、『カラマーゾフの兄弟』を「最低でも五十回は読んだ」という。その表現には誇張があるにせよ、ではヴィトゲンシュタインはニヒリズムを看取することを動機として、同著を繰り返し読んだとでもいうのだろうか。絶望の中でこそ希望がいつそう大きく輝くように、逆に喜びが悲しみを秘めることでいつそう大きな感慨を生むような。パスカルの言うとおり、人間とは「悲惨」と「偉大」の「中間者」(un milieu entre rien et tout)である。しかしだからこそその人間たちが織りなすこの現し世とは、希望でもないが、まただからといって絶望であるはずがない。ドストエフスキーの諸作品の偉大さは、濁世の渦中にある、それでも彼方の地平に希望の光を、確かに映してみせたことにあると思う。

イリユーシャの埋葬を終えた後、少年たちに囲まれてアレク

セイ・カラマーゾフは次のように述べる。

「これからに人生にとつて、何かすばらしい思い出、それも特に子供のころ、(中略)少年時代から大切に保たれた、何かそういう美しい神聖な思い出こそ、おそらく、最良の教育にはかならないのです。そういう思い出をたくさん集めて人生を作りあげるなら、その人はその後一生、救われるでしょう。そして、たった一つしかすばらしい思い出が心に残らなかったとしても、それがいつの日か僕たちの救いに役立つのです」

幼い日の兄マルケールとの美しい神聖な思い出が、青年期のゾシマに殺人(決闘)を思いとどまらせたように。そして、そのゾシマの姿は、一人の殺人者(ミハイル)を告白へと導いた。アレクセイの言葉に耳を傾けながら、美しい涙を流す少年たちに、私は、夕映えの遠い懐かしい日々がよみがえるような感慨を覚える。

「カラマーゾフさん！」コーリヤが叫んだ。「僕たちはみんな死者の世界から立ちあがり、よみがえって、またお互いにみんなと、イリユーシエチカ（イリユーシヤ）とも会えるって、宗教は言ってますけど、あれは本当ですか？」

「必ずよみがえりますとも、必ず再会して、それまでのことをみんなお互いに楽しく、嬉しく語り合ってください」半ば笑いながら、半ば感激に包まれて、アリヨシヤ（アレクセイ）が答えた。

「ああ、そうだったら、どんなにすてきたらう！」コーリヤからこんな叫びがほとばしった。

すべては死をもつて終わる。人間にはこれ以上のことは言えない。それではすべて無意味になるのか。アレクセイはありもしないことを宗教の方便として、あるいは取るに足らない諧謔として語つたにすぎないのであろうか。

「人間はしばしば、善良で立派なものをあざ笑いますから。でもそれは浅はかさから生まれるものなんです。けれ

ども、みなさん、ぼくはきみたちに保証します。思わずにやりとしたとしても、心はずぶにこう語りかけてくるでしょう。『いいや、笑つたりして悪いことをした、だって、笑つてはいけないことなんだもの！』ってね」

「そう、かわいい子どもたち、かわいい友人たち、どうか人生を恐れなさい！なにか良いことや、正しいことをしたとき、人生つてほんとうにすばらしいって、思えるんです！」（アレクセイの言葉より。この二つの訳文のみ亀山

郁夫訳。光文社古典新訳文庫）

偉大な作品とはそれじしんでは完結しない、決して終わらない。マルケールからゾシマへ、ゾシマからアレクセイへ、アレクセイから少年たちさらにコーリヤへ、そしてコーリヤからこの書に邂逅したすべての読者の一人ひとりの人生へと、この書の仄かな希望は手渡されていく。その意味で、作品の終結にあたり、実はこの作品の冒頭に掲げられていたヨハネ伝の聖句へと見事に円環したといえる。

「よくよくあなたがたに言っておく。一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる」（『ヨハネによる福音書』第十二章二十四節）

だからこの作品は、「およそ続編というものがまったく考えられぬほど完璧な作品」（小林秀雄）といえるのだと思う。

したがってもし続編を創造するとすれば、それは今度は我々読者の方であり、次の新しい希望の一ページは私たち一人ひとりが、これからの人生の中で紡ぐ。そしてそれは、私たち一人ひとりの人生の中に書き込まれていく。

「いつまでもこうやって、一生、手をつないでいきましょうー」

大著『カラマーゾフの兄弟』は、こんな純粹で、こんな優しい言葉で全ページが閉めくられる。万感の思いに満たされて、しかし作品は今再び、新たな鼓動を脈打ち、その新しい扉を大

きく開く。そして、その豊かな実りを永遠に結んでいくのだ！

「邂逅！そのみが真実を開示する。人間の新生も、死よりの復活も、偉大なる邂逅として以外は絶対に把握されない。ドストエフスキーの全作品に充ち満つる人間の苦悩は、人類を救う偉大なる現実の邂逅へ、終末的に、指向されているのである。かれは絶望している。しかも絶望していない」

森有正『ドストエフスキー覚書』より

〈参考文献〉

ドストエフスキー、原卓也訳『カラマーゾフの兄弟』上・中・

下巻（新潮文庫一九七八年）

同、米川正夫訳『同』第四卷

（岩波文庫一九五七年）

同、亀山郁夫訳『同』エピソード別巻

（光文社古典新訳文庫二〇〇七年）

同、江川 卓訳『悪霊』上・下巻

（新潮文庫二〇〇四年）

同、江川 卓訳『罪と罰』上・下巻

(旺文社文庫一九六七年)

森 有正『ドストエーフスキー覚書』(筑摩叢書一九六七年)

小林秀雄『ドストエーフスキイの生活』(創元文庫一九五一年)

木田 元『なにもかも小林秀雄に教わった』

(文春新書二〇〇八年)

宮沢賢治『農民芸術概論綱要』(青空文庫POD二〇一七年)

同 『銀河鉄道の夜』(旺文社文庫一九八一年)

ドストエーフスキー『まんがで読破カラマーゾフの兄弟』

(イーストプレス二〇〇八年)

シエストフ、近田友一訳『悲劇の哲学ドストイェフスキーと

ニーチエ』(現代思想新社一九六八年)